

面の事柄についてとくに関心を寄せられていた。とくに、京阪地方の民間医学者の業績については心をこめて研究をされていたことも銘記されるべきである。

なお、博士が収集された絵画と医学との関係を示すものも、後進の人々に対して大きな指針となったものである。麻疹、コレラ等の流行、さらには産時に関する諸々の風習を描いた版画等についても貴重な考証を試みられている。

さらに忘れてならないのは、先生が『医譚』の発行に力を注がれたことである。『医譚』は京阪地方を中心とする億川撰三、大矢全節、中野操等諸先生の発企により昭和十三年二月に杏林温故会が興り、その機関誌として発刊されたものである。この雑誌の発行により関西方面の医史学上の研究が大いに発展したのであるが、同会の存続に力を尽くされた先生方が次々に死去された後も、中野先生は『医譚』の発行に熱心に当られ、独力を以てまったく献身的に長期に亘って努められたことは実に頭が下る思いである。これとあわせて思い起すことは、先生の奥様が協力を惜しまれなかったことで、私は関西支部の会合につとめて出席したが、その何時の場合でも、夫人が献身的に尽くされていたご様子を忘れることは出来ない。その奥様も今はすでに他界されているのは悲しい極みであるが、泉下に在って先生と共に医史学の発展を見守っておられることを信じたい。

(日本医史学会理事長)

中野操先生を慕う

後学 三木 栄

中野操先生(以下大兄と略称)は、『医譚』の編集発刊を中心とし、日本医史学会並びに同会関西支部の発展に尽くされ

た、これに大兄は生涯を捧げられたのである。

因みに、大兄の医史研究は、関西全般、とくに大阪・京都を柱とした蘭医学史であるが、近隣各域、そして日本各地にも及んでいる。

大兄は偉丈夫にして温厚、包容力は大きくしかも緻密、親身を以て心と同じくする多数の会員の研究心を揺り動かし、自ら陣頭に立って休みなく世話し労を惜しまれなかつた。

大阪は、昔から東都の官学的な風に対し普遍民衆的な社会構成であつた。その心を承け継ぎ、大兄は独自の関西医史学開発にひたすら進まれたのである。そして並行して医の民俗風習の発掘に大きい業績を挙げられた。これは大阪文化史上特筆されている。

杏林温故会日本医史学会関西支部は、最長老佐伯先生・億川先生・中野大兄等から発し、医史学同好の諸氏により昭和十三年に杏林温故会を興し、『医譚』を創刊し、研究論説を季刊發表した。しかし大戦発生のため休刊の止むなきに至つたが、戦後間もなく又同志相糾合し、例会を度々(月一回)催し相研鑽し、東京本部に先駆けし昭和二十七年に『医譚』を復刊し得た。

大兄は関西ばかりでなく広く東西各地からも会員の投稿を求めた。杏林温故会は、山崎会長先生の許可を得て、日本医史学会関西支部として認容された。機関雑誌はそのまま『医譚』の名称を踏襲した。

関西支部は多士濟々、佐伯先生・阿知波先生・羽倉先生・伊良子先生・大矢先生・岡西先生・池田谷先生・前田長先生・田川八先生・布施玄先生・森下先生、等々。みな故人となられた。嗚呼。しかし現在御活動の多数の方々も知る人ぞ知る、みな斯会の大家ばかりである。

これら諸先生諸兄が、凡そ月一回予定された会場に集まり研修会を開いた。家族同伴が通則、交互に当番が世話し、医史関係の名所旧蹟を尋ね見学した。時には一夕の小宴をも設けた。春秋二期には大会がもたれた。牟田先生が快よく常に

会場を提供して下さった。この主世話人は勿論大兄である。これらの催しは、和気あいあい有益な集会で、会員の心が結ばれ、致知の向上に役立ったのである。

われわれの関西の医史研究群は、大兄があつて育てられたのであるが、しかし煩雑な付帯事務をなされたのは、貞淑な御奥様の大きい援助であり、会員等しく感謝するところである。

大兄の御他界後（奥様も次いで亡くなられる）は、愛弟子の長門谷兄が委嘱（遺言に等し）に沿ひ諸事万端を引き継がれ、同じ路を踏みつつ前進に努め今に至っている。

大兄の論著は汗牛充棟、御履歴や表彰などは『医譚』誌に収録されている、披見下されば幸い。単行専書も数部あり広く世に知られているが略する。

諸先生のうち御他界なされた方が少なくない。後輩小生も間もなく大兄の後を追う老病人、手元に依拠書物なく、おぼろな記憶を辿りつつ、ただ小言するのみ、大兄と幽界に在っても談笑したい。（八十五才春記す）

（日本医史学会名誉会員）

中野操先生をしのぶ

田 中 助 一

日本医史学会関西支部長として永年御在任になって、会の運営はもとより、多くの有益な著作や論文を発表された中野操博士は、昭和六十一年三月二十一日に八十八歳で御永眠になり、今年『日本医史学雑誌』で追悼特集号を出されることになったことは喜ばしいことである。